
シンポジウム

論題 中世哲学と現代

—国家と正義—

司会 加藤 信朗

提題：現代の政治哲学における主要な
論点と問題点

聖心女子大学 岩田 靖夫

提題：中世政治思想から何を学ぶか

長崎純心大学 稲垣 良典

提題：理性的独立の人間像から共に
生きる人間像へ

東北大学 清水 哲郎

(於 英知大学 1999.11.14)

司 会

加 藤 信 朗

今回のシンポジウムはこれまでと趣向を変えて、中世哲学のなかにある問題を取り上げるというより、現代哲学の問題から出発して、中世哲学はこれに対して何を答えるかを、それぞれの立場から論じ合ってみようということになった。掲げられた「中世哲学と現代」というタイトルはこれを言う。数回継続することになっており、今年度は主題として「国家と正義」が選ばれた。三人の提題者に論点をそれぞれ整理していただいたうえで討論に移ることになるが、討論についてもこれまでのやり方とは趣向を変え、提題者の一人またはすべてに質問を提出するという仕方をやめ、参加者がそれぞれ自分の論点を出して討論に加わり、いわば一人のパネラーとなるという仕方ですることにした。

岩田氏の提題は、現代の社会哲学・正義論を代表するものとしてJ.ロールズ (liberalism)、ノジック (libertarianism)、テイラー (communitarianism) を紹

介しつつ、この問題への今日的なパースペクティブを示すものであった。稲垣氏のそれはこれに直接に答えたとはいえないかもしれないが、主としてトマス・アクィナスの立場を代表して、恩寵と自然という重層構造を基底においてもつトマスの社会哲学は今日受け入れられにくい性質をもっていることを認めたいうえで、中世はこの重層性のゆえに、むしろ、近代の自由主義、人間主義を基盤とする、現代の社会哲学に反省を迫る点を持つことを示唆するものであった。清水氏の提題は清水氏が現在コミットしておられる医療現場という問題状況を基盤として、やはり同じように近代の個人主義を前提にした平等の観念は現代ではそのままでは認めたいものであること、弱者の立場にたつとき、別のパースペクティブが求められてくるのではないかを指摘するものであった。アマルティア・セン氏の見解をも引き、libertarianよりはむしろ communitarian のほうに、人類の現代的状況に適合する正義の観念の現実化がありうることを示そうとするものだった。そして、そこにイエス・キリストのメッセージから出発してこの問題に向かうものと一致する立場があり、ここに正義と国家の問題に関する中世的視点が甦るところがあるとするものであった。

三氏の提題の論点はその基底において鋭く対立する部分を持ち、提出された問題をめぐって三つの炎が燃え上がり、互いに重なり、かつ離れながらめぐっているという感じを司会者は抱いた。そしてこれはヨーロッパがはじめの千年紀（ヨーロッパ古代・中世）と、続く千年紀（中世・近世）を通じて経験し、学んできたことを問題の中心に据えるものであるように思えた。また、それは清水氏がその提題の最後で触れた「個」と「ペルソナ」の問題に帰趨してくるようにも思えた。一言で言えば、それは「ヨーロッパ的経験（European Experience）」と呼べるものである。これから始まる次の千年紀において人類がこれをどのようなものとして受け入れ、どのようなものとして新しく改築し、構築していくかにこのシンポジウムの主題はあるように見えた。これはわたしたちすべてに今後変わらぬ問題として迫る問題であり、とりわけ東アジアの文化圏に属するものとしてのわたしたち日本人にはこの問題に対してどのように対処すべきかの解答が迫られていると思えた。

討論は参会者により、司会者の要望する方向で進められ、傾聴すべき多数の論点が提出され、発言者はそれぞれ一人のパネラーとなり、会場はさながら同じ問題をめぐり渦を巻いて燃え上がる一つの炎と化した。司会者もしばしばこの渦に巻き込まれ、一人のパネラーとなって討論に参加することになった。

主な発言趣旨は以下に載せられている通りなので、ここで要約することを要しない。おおむねは、近代ヨーロッパの個人主義、自由主義を前提として成立してきた国民国家の枠組みがそのままでは成立しえなくなっている現代において、どのようにして「個」の尊厳を守り、発展させる社会秩序を構築しうるかという問題に集約してゆくように思われた。主権国家の壁はどこまで取り除きうるのか、画一的・一元的な世界支配の力に対して弱者の尊厳はどのように守られうるのか、これからの社会においてこれを纏める何らかのシンボルが機能しうるのか、contemplatioの場所はどこで確保されるのか、communityはどのような形を取りうるのか、教会が担うべき役割は何か、そもそもそれはあるのか。多岐にわたって提出された問題はいずれも両用の見方を許すものであり、解決困難な問題である。しかし、それは今日に生きるものが直面し、その解決のために身を挺して当たらなければならない問題である。ヨーロッパ中世はこれまで画一的社会のように思われてきたが、じつは極めて多層的な世界であったのであり、そこから今日の人々は学ぶべきものをもつということを示してくれたシンポジウムであったと思う。ヨーロッパ共同体の理念と実際は何らかそこから起動してくるように思える。東アジアの伝統文化に長く担われてきたわたしたちがヨーロッパ中世哲学研究者として同じような理念を今日の世界にどのようなものとして提示しうるかが問われているのだと思う。

提題 現代の政治哲学における主要な論点と問題点

岩田 靖夫

私に与えられた課題は、現代の政治哲学における主要な論点の要約と問題点の指摘である。現代の政治哲学でなにか問題となっているか、それらの問題点と中世の政治倫理思想がどう噛み合うか、あるべき政治倫理思想とはどのようなものなのか、これらの問題を討議するための素材として以下を提出したい。